

豫楽院 近衛家熙公年譜稿 (一)

緑川明憲

(凡例)

- I 近衛家熙の年齢は数えて示した。
 - II 改元のあった年は、それまでの年号は省略し、新たな年号のみを挙げた。
 - III 月日(あるいは月のみ・四季のみ)の明確な事項には冒頭に●を、年のみが明確な事項には冒頭に★を付した。
 - IV 各年の下に付しているゴシックの官位は、その年の末における家熙の官位である。
 - V 年譜を作成する際に用いた典拠のうち、特に頻出するものは○内に略記のかたちで示した。
- (无上) || 品官常子内親王『无上法院殿御日記』
(基熙) || 近衛基熙『基熙公記』
(家熙) || 近衛家熙『家熙公記』
(家久) || 近衛家久『家久公記』

(御詠草) || 近衛家熙『家熙公御詠草』
(御茶湯) || 近衛家熙『御茶湯之記』
(家司記) || 『近衛家家司記』
(雑事日記) || 『近衛家雑事日記』
(繰出) || 『近衛家御用部屋日記繰出』

※以上、右の九点の原本は陽明文庫蔵。ただし、『无上法院殿御日記』・『基熙公記』・『家熙公記』・『家久公記』の四点は、東京大学史料編纂所蔵の謄写本によった。

(家譜) || 『近衛家譜』(東京大学史料編纂所蔵)
(秘鈔) || 『看聞秘鈔』(更衣山西王寺蔵)
(槐記) || 山科道安筆記『槐記』(陽明文庫蔵山科道安自筆本及び東坊城家本〔明治二十三年〕)
(遺墨) || 『予楽院遺墨』(恩賜京都博物館編、昭和

十年)

(頼庸) 〓 錦小路頼庸『錦小路頼庸朝臣記』(国立公文書館蔵)

(堯恕) 〓 妙法院宮堯恕親王『堯恕法親王日記』(『妙法院史料』第一〜第三卷所収、吉川弘文館、昭和五十一年)

(京記) 〓 木村探元『京都日記』(『史料 京都見聞録』第一卷所収、法蔵館、平成三年)

(他所) 〓 進藤長之『他所之茶事道具献立之留』(『研究と資料 茶湯』第十一〜十四号所収の木下龍也氏翻刻、思文閣出版、昭和五十一年
〓 五十二年)

VI 家熙存命中の寛文九年及び同十二年については、管見の限りでは現段階で家熙に関連する記事を見出し得なかった。このため、この二ヶ年に関しては年号・西暦・干支・家熙の年齢のみを記すにとどめた。これに関しては、以後の自己への課題としたい。

VII 年譜中の登場人物に冠した官職名は、原則典拠のままである。官職名が記されていない場合もまた、典拠のままである。ただし、『諸家伝』・『地下家伝』・『寛政重修諸家譜』などを参考にし、なるべく可能な限り付記するようにつとめた。また、典拠に官職名のみしか

記されていない者に関しても、上記の書物などによって可能な限りその姓名を付記するようにした。

VIII 家熙の詠じた漢詩、あるいは書写の際に書かれた奥書などは、可能な限り著録するようにつとめた。奥書などに付したノは原本における改行箇所を、■は判読不能箇所をそれぞれ示す。なお、和歌に関しては題のみを示すにとどめた。これは、家熙の詠じた和歌は特に別稿を用意して紹介したいと考えているからである。

IX なお、この年譜稿は当(一)に引き続き、(二)を元禄四年(一六九一)から宝永五年(一七〇八)、家熙四十二歳)まで、(三)を宝永六年から享保八年(一七二三、家熙五十七歳)まで、(四)を享保九年(家熙五十八歳)以降として区切り、順次発表していく予定である。

(附記)

この年譜の作成にあたり、資料などの閲覧を常に快く認めて下さいます、財団法人陽明文庫 文庫長の名和修先生に厚く御礼申し上げます。

寛文七年（二六六七）丁未 一歳

●六月四日、戌刻、誕生（『看聞秘鈔』卷四所収の『長房卿雜記』では、酉上刻とする）。幼名は増君ますみ。父は内大臣右大将近衛基熙、母は後水尾院皇女の品宮常子内親王。誕生の際、形式的な措置としてではあるが、権大納言柳原資行の子とされた。同母姉には姫君（熙子。寛文六年三月二十六日に誕生。のちに六代將軍徳川家宣御台所となり、家宣没後は天英院と号した）、同母弟には直君（信名。寛文九年四月二十七日に誕生。始め四辻季輔養子、のち大炊御門経光養子）がいる。家熙の乳母は左近（富小路貞維母）がつとめた。なお、家熙の誕生日は祖父の後水尾院と同じである。（无上・基熙・秘鈔）

寛文八年（二六六八）戊申 二歳

●八月二十一日、常子内親王に連れられて、姉とともに初めて参内。（无上）

寛文九年（二六六九）己酉 三歳

寛文十年（二六七〇）庚戌 四歳

●九月二十五日、痘瘡予防のための灸を「白井どう松」なる者がすすめる。この措置は、前日の二十四日に叔父の一乘

院宮真敬親王が痘瘡のため重態に陥ったためと考えられる。（无上・堯恕）

寛文十一年（二六七二）辛亥 五歳

●二月二十四日、辰刻、深曾木（髪を左右にわけて、その端を肩のあたりで切り揃える儀式）を行う。近衛家の家臣や出入りの者たちが総出で祝いを行った。後水尾院から金千疋及び白鳥一羽を祝儀として贈られたほか、祖母の新広義門院（園国子。後水尾院妃、常子内親王母）や曾祖母の円珠院（近衛信尋室。池田氏）などからも祝儀が贈られた。（无上）

●五月二十四日、近衛家別邸のひとつである桜御所で、初めて祖母の瑤林院（近衛尚嗣室、基熙母。堀氏）と対面。（无上）

寛文十二年（二六七三）壬子 六歳

延宝元年（二六七三）癸丑 七歳 従五位上権右少将

●五月八日、丑刻、関白鷹司房輔邸より出火し、禁裏等が罹災。霊元院は三種の神器とともに近衛邸へ行幸し、そのまま仮皇居となる。近衛家は二階町の妙法院里坊へ移り住む。（堯恕）

●九月二十八日、常子内親王、紫竹（現・京都市北区）に新たに屋敷を入手。以後は常子内親王だけでなく、家熙もしばしば訪れるようになる。（无上）

●十月一日、来月元服するべき沙汰が禁中より下る。先例として名字（名乗り）は「儒家之人」（基熙）によつて撰進されることになつていたが、増君には霊元院から勅賜されることとなつた。この時の「家熙」勅賜が先例となり、以後、ほかの摂家を含む廷臣の中でも、近衛家の当主のみに限り、宸筆で名字が勅賜されるようになった。なお、増君の名字の候補は「家熙」・「基前」・「植久」であつた。（无上・基熙・下橋敬長『幕末の宮廷』）

●十一月四日、十五日の家熙元服に際し、理髪役をつとめる予定であつた頭左中弁日野資茂が所労のため辞退。代わりに左中将東園基量がつとめることに決定。（東園基量『元服理髪要私記』）

●十一月十日、名字「家熙」を霊元院より勅賜。（基熙・家譜）

●十一月十二日、「かくべちの御よしみ」のため、後水尾院より元服の祝儀として黄金二十兩・御服一重・鶴一羽を贈られる。また日録外の祝儀として末広も贈られる。（无上）

●十一月十五日、元服。加冠は関白鷹司房輔、理髪は左中

将東園基量、扶持人は参議右大弁柳原資廉。また、弾正大弼竹内当治が冠を、侍従平松時方が冴器を、侍従吉田兼連が櫛巾をそれぞれ持参する役に就く。元服は辰刻二点より始まり、家熙は部屋西南の方向から簾を巻き上げて入室し、やや膝行して着座。この時の服装は「文小葵紫龜甲指貫」（『元服理髪要私記』）という童装束であつた。参加者は妙法院宮堯恕親王（伯父）・青蓮院宮尊証親王（叔父）

・大納言大炊御門経光・中納言阿野季信・参議左大弁甘露寺方長など「雲客數十人、地下之輩多輩」（堯恕）であつた。なお、元服後、家熙は「冠直衣、指貫龜甲濃紫」（『元服理髪要私記』）姿を披露している。同日、従五位上に叙せられ、禁色及び昇殿を聴される。この日、後水尾院は孫である家熙の元服に「このの外御機げん」（无上）であつたという。またこのような場合の先例にはなかつたが、禁中より絹五疋を贈られる。（无上・基熙・家譜・堯恕・東園基量『元服理髪要私記』）

●十一月十九日、権右少将に任ぜられる。（家譜）

延宝二年（一六七四）甲寅 八歳 従四位上権右少将

●一月五日、従四位下に叙せられる。（家譜）

●十二月二十七日、従四位上に叙せられる。（家譜）

延宝三年(一六七五)乙卯 九歳 従四位上権右中將

●一月二十四日、疱瘡に罹患していることが発覚。前年十月二十九日に常子内親王が疱瘡に罹っており、そのあたりからの感染か。(无上)

●二月九日、疱瘡が快癒したので酒湯を浴びる。後水尾院より祝儀として鶴亀作物・双樽・黄金十両を贈られる。(家譜)

●七月二日、基熙とともに妙法院へ出掛け、暮れごろに帰宅。(堯恕)

●七月十日、権右中將に任ぜられる。(家譜)

●十一月二十五日、巳下刻、一条油小路より出火、常子内親王・姫君・直君とともに青蓮院へ避難する。仮皇居となっていた近衛邸や近衛家の文庫も類焼し、藤原忠通所用の笏・基熙十四歳以来の日記・掛物数百幅などが消失するも、近衛家に仕える桜井縫殿助・進藤修理・今大路出羽・浦野大学らが外へ取り出したため、大半は無事だった。(无上・基熙・柳原紀光『続史愚抄』)

●十二月一日、青蓮院が狭隘なため、常子内親王たちとともに大仏にあった妙法院院家の日嚴院堯憲(贈左大臣園基音男。常子内親王の叔父)邸へ移り住む。基熙のみは桜御所へ移り住む。(雑事日記)

●十二月二十一日、日嚴院堯憲邸より桜御所へ移り住む。

火事見舞いとして水戸徳川家より布団・屏風・白縮緬などを贈られる。(雑事日記)

延宝四年(一六七六)丙辰 十歳 従三位権中納言権右中將

●一月二十九日、従三位に叙せられる。(家譜)

●二月三日、弘前藩津軽家より前年末の火事見舞いとして黄金三十枚及び絹十疋を贈られる。(基熙)

●二月九日、將軍徳川家綱より火事見舞いとして金千両を贈られる。(基熙)

●四月六日、伯母に当たる伏見宮貞致親王御息所の好君、薨去。(堯恕)

●六月二十四日、和歌一首を詠ずる。題「松」。添削者は不明。管見の限り年代の明確な最古の和歌。(御詠草／函架番号六一六七五)

●六月二十六日、『般若心経』を書写。(『近衛家熙公遺墨展覧会日録』)

●八月八日、和歌一首を詠じ、書写。この書について、近衛家家臣である寺田無禅は識語の中で「古徳之躰、殆親近于野佐之両跡矣」であると述べている。(陽明文庫蔵／函架番号九〇三三九)

●八月十五日、和歌一首を詠ずる。題「夏月」。添削者は不明。(御詠草／函架番号六一六七六)

●九月十九日、常子内親王たちとともに近江国石山寺及び園城寺を参拜。(无上)

●十一月二十九日、「道風之手本」であるところの『新楽府』一卷を書写。(陽明文庫蔵／函架番号九一九九二)

●十二月三日、近衛邸の新築成る。この日の晩より日嚴院堯憲が近衛邸新邸のための安鎮法を修する。(堯憲)

●十二月九日、十二月三日より修されていた近衛邸新邸の安鎮法、結願。(堯憲)

●十二月十八日、新邸へ移住。(堯憲)

●十二月二十一日、新邸になって初めて後水尾院が近衛邸へ行幸。(堯憲)

●十二月二十三日、権中納言に任ぜられる。(家譜)

★此年、『般若心経』を書写。(新『書道全集』22)

★此年か、「鍾馗図」を揮毫。(陽明文庫蔵・遺墨)

延宝五年(一六七七)丁巳 十一歳 従三位権大納言

●一月一日、元日節会の外弁をつとめる。(家譜)

●一月十六日、踏歌節会の外弁をつとめる。(家譜)

●七月三日、寅刻、曾祖母の円珠院没、享年八十四。法名、瑩心日宝。円珠院は近江国に生まれ、池田伊予守の娘とも、池田勘兵衛の娘ともいわれる。藤堂家家臣の米友左近右衛門方にその住まいがあったという。(无上・秘鈔) この池

田伊予守とは、あるいは豊臣秀長に仕えた池田孫次郎秀氏か。伊予守は文禄の役にも従軍した侍だが、千利休・神谷宗湛・津田宗及らと茶の湯を交歓したといわれる茶人でもある。『原色茶道大辞典』・『角川茶道大事典』

●七月五日、夜半、祖母の新広義門院薨去、享年五十四。(无上)

●八月二十三日、戌刻、近衛邸内で青侍某が癡狂、一人を殺害する騒動が勃発。(基熙)

●八月二十六日、新広義門院の形見として六歌仙屏風一双を贈られる。(雑事日記)

●九月二十五日、基熙主催の連歌会に参加。参加者は三名。発句は近衛家諸大夫の修理権亮進藤長房が夢に見た内容に基づく。「思へたどあまてらす日のめぐみ哉／氏の栄もし

るやどの秋(進藤長房)／年の賀の折をえがほに菊咲て(基熙)／紅葉のかげのあかぬともなひ(家熙)」「(基熙)

●十月十六日、新文庫完成、青蓮院に預けてあった近衛家の記録類を基熙とともに引き取る。(基熙)

●十一月七日、新文庫へ記録類を納入。(无上・基熙)

●十二月二十五日、和歌二首を詠ずる。題「年内梅／氷」。(陽明文庫蔵・二首懐紙・御詠草／函架番号六一六七八)

●閏十二月十一日、権大納言に任ぜられる。(家譜)

延宝六年（一六七八）戊午 十二歳 正三位権大納言

●一月八日、後水尾院より近衛邸普請のため金三千両を贈られる。（无上）

●五月七日、有卦入り。妙法院宮堯恕親王たちから祝儀を贈られる。（堯恕）

●六月二十六日、この年六月十五日に薨去した東福門院の葬礼を、基熙・一乗院宮真敬親王・常子内親王・大聖寺宮永亨女王（叔母）たちとともに見る。（堯恕）

●十二月十九日、正三位に叙せられる。（家譜）

延宝七年（一六七九）己未 十三歳 正三位権大納言

●一月十五日、後西院・緋宮光子内親王・基熙・常子内親王たちとともに、後水尾院のもとへ伺候。「如例」とあり、いつものことであつたらしい。（堯恕）

●一月二十八日、高家の吉良上野介義央が来邸し、対面。（基熙）

●六月二十六日、靈元院皇女の女一の宮憲子内親王との婚姻が決定。同時に姉の姫君と甲府中将徳川綱豊（のちの六代將軍家宣）との婚約が江戸より伝えられる。（无上）

●七月十七日、齒黒め及び眉上げ（作眉）を行う。（基熙）

●十月八日、弟の直君、大炊御門経光の養子となることが決定。（基熙）

●十一月二日、妙法院宮堯恕親王の天台座主再任の祝儀として、馬太刀銀十両を贈る。（堯恕）

●十一月十六日、姫君の結納の使者として江戸より森川四郎右衛門が上京、祝儀として小袖三重・太刀・馬代金三枚・二種一荷を贈られる。（无上・基熙）

●十一月二十六日、日の出頃、姉の姫君が江戸へ向け出立。（无上）

延宝八年（一七八〇）庚申 十四歳 従二位権大納言

●一月五日、將軍徳川家綱より緞子を、徳川綱豊より絵草紙などを贈られる。（无上）

●一月二十六日、徳川綱豊より祝言の御札として金造りの太刀・小袖三重・黄金百両を贈られる。（无上）

●一月二十八日、近衛家殿上人及び諸大夫の沙汰として、酒肴が献ぜられ、常子内親王の御殿で囃子（弓八幡・吉野静・盛久・山婆・三輪・柏崎・狸々）が催される。当然、家熙も参加したものと思われる。（堯恕）

●二月二十六日、和歌五首を詠ずる。題「夜鹿／流螢／萩露／名所月／聞時鳥」。添削者は後水尾院か。（御詠草／函架番号六一六八一）同日か、和歌二首を詠ずる。題「山霞／行路柳」。（御詠草／函架番号六一九〇三）

●四月二日、「洛陽ノ牡丹」といわれた青蓮院の牡丹の花

- を見るため、常子内親王・妙法院宮堯恕親王・日嚴院堯憲・慶寿院（冷泉為清室）たちともに出掛ける。（堯恕）
- 四月二十三日、芍薬や杜若の花を見るため、基熙・常子内親王・慶寿院たちとともに妙法院へ出掛ける。（堯恕）
- 七月二十八日、水痘発症。小児科医の人見慶安が来邸し、薬を服用せずとも気遣いない旨を診断される。（家司記）
- 人見慶安のちに禁裏御典医となり、法印に叙せられ、杏樹院を称した。
- 八月六日、水痘治癒。大工頭の中井主水正知より寺田無禅を介して「かりがね虫籠」を贈られる。（家司記）中井家は作事奉行の支配下にある大工頭を代々世襲し、五畿内と近江をその管轄下においていた。この正知は中井家の三代目に当たり、当時は三条通西に住まいした。のち榎木町通寺町角（元禄十年以降）、さらに宝永五年から寺町通丸太町上ルを屋敷地とした。（平井聖氏『中井家文書の研究』）
- 八月十一日、巳刻、御所に後水尾院を見舞う。（家司記）
- 八月十七日、後水尾院を見舞う計画をたてるも、膝のあたりに腫物ができたため行くことが出来ず、門流（家来筋）の公家人道可心（交野時貞）たちを介して見舞いの口上を述べる。（家司記）
- 八月十九日、丑刻、祖父の後水尾院崩御、宝算八十五。（无上）

- 八月二十四日、鍼医師の藤木駿河が来邸、家熙に鍼治療を行う。（家司記）
- 閏八月七日、徳川綱豊より西行筆の掛幅一幅を贈られる。（无上）
- 閏八月二十四日、後水尾院追善のため『般若心経』を书写。（基熙）
- 十月六日、後水尾院の形見として螺鈿の机及び唐本を贈られる。（无上）
- 十二月二十三日、従二位に叙せられる。（家譜）
- 天和元年（二六八）辛酉 十五歳 従二位権大納言**
- 三月二十一日、常子内親王・大聖寺宮永亨女王・慶寿院たちとともに妙法院へ出掛ける。（堯恕）
- 四月二十四日、後西院の『後撰和歌集』講釈を聴聞、そのあと囲居で後西院より基熙及び常子内親王とともに茶を振る舞われる。（无上）
- 五月二十五日、囲居で基熙・常子内親王・中務卿（常子内親王乳母・滋野井実光母）・寺田無禅に茶を振る舞う。亭主として初か。この前後より茶事が急増している。（无上）
- 九月二十八日、初めて改元の仗儀に参加。家熙の作法は「諸人感」（基熙）ほどであり、父母を喜ばせた。（无上）

・基熙

●十月二日、九月二十八日の仗儀の作法が殊勝であつたため、禁裏より女房奉書が到来、牡丹及び鯛一尾を贈られる。

(基熙)

●十月五日、基熙・常子内親王・慶寿院たちとともに妙法院へ出掛ける。(堯恕)

●十一月中旬、『百人一首注』を書写。奥書「此鈔者旧院御講談之日摘諸抄之最要所令染宸翰給候也深秘函底不出窗外雖然左相府基熙公三部抄之口訣相伝之次免書写仮名真名不違一字手自經書功被遂校合了今又可記由緒之旨依所望聊書之而已」天和元黃鐘仲旬(高橋貞一氏「陽明文庫国書善本日録」)

天和二年(二六八二)壬戌 十六歳 從二位権大納言

●一月一日、細川幽斎の茶頭で百歳の百庵より、自作の茶杓(銘「不老門」)を贈られる。(名和修氏『薫る公家文化 近衛家の陽明文庫から』・東京国立博物館『宮廷のみやび―近衛家一〇〇〇年の名宝』展図録)

●三月、和歌を詠ずる。添削者は不明ながら、家熙の署名の下には「上」とあり、上皇または天皇による添削か。題

「客依月来」(御詠草/函架番号六一六八五)

●四月十四日、自邸に囲居を新築。庭は「石などすべ、山

ざとめきたる心地」といわれた。(无上)

●六月二十五日、兼日和歌会に出詠。添削者は不明ながら、家熙の署名の下には「上」とあり、上皇または天皇による添削か。題「脩竹不受暑」(御詠草/函架番号六一六八二)

同日、当座和歌会に出詠。この詠草も添削者は不明ながら、家熙の署名の下には「上」とあり、上皇または天皇による添削か。題「霞隔遠樹」(御詠草/函架番号六一六八四)

●七月二十二日、「亜相(家熙)有臨池之志」により、基熙より後水尾院所用の若州土産紫石硯及び唐墨を贈られる。(基熙)

●八月七日、卯刻過ぎより、栗田口の町家で朝鮮通信使の行列を常子内親王及び直君とともに見る。(无上)

●八月十一日、徳川綱豊より十種香の道具を贈られる。(无上)

●八月十八日、後水尾院の三回忌に際し、『般若心経』を書写。(『近衛家熙公遺墨展覧会日録』)

●八月二十一日、宮中懺法講(導師は毘沙門堂宮公弁親王)を聴聞。(堯恕)

●九月八日、後西院の『伊勢物語』の講釈を聴聞。(无上)

●九月十六日、基熙の主催する和歌内会に出詠。「秋祝」の添削者は基熙。「名所山」の添削者は不明ながら、家熙の署名の下には「上」とあり、上皇または天皇による添削

か。(基熙・御詠草／函架番号六一六八六・六一六八七)

●九月十七日、和歌一首を詠ずる。添削者は基熙。題「あきのかたみを」(御詠草／函架番号六一六八八)

●九月二十七日、後西院の催す茶の湯に基熙及び一乘院宮真敬親王たちとともに参加。(『後西院御茶湯之記』)

●九月二十八日、当座和歌会に出詠。添削者は基熙。題「山鹿」(御詠草／函架番号六一六八九)

●十月十七日、後西院へ詠草を献上、院より初めて和歌の添削を受ける。題「竹為師」。以後、貞享二年二月六日(後西院の崩御する十六日前)まで添削指導を受けることとなる。(御詠草／函架番号六一六四六)

●十月二十五日、兼日和歌会に出詠。添削者は後西院。題「雪中遠望」(御詠草／函架番号六一六四七)

●十一月十三日、兼日和歌会に出詠。添削者は後西院。題「池水鳥」(御詠草／函架番号六一六四八)

●十二月十一日、弟の直君、大炊御門家へ移る。(无上)

●十二月十三日、弟の直君、大炊御門家で元服、信名と改名。(堯恕)

天和三年(一六八三)癸亥 十七歳 從二位権大納言東宮大夫
●一月六日、基熙の代理をつとめた際、東求院前久以来「当家之例」といわれた装束に基づいて、紅の直垂に小刀を初

めて着用。(基熙)

●一月十四日、大炊御門信名とともに妙法院へ出掛ける。(堯恕)

●二月三日、後西院の催す茶の湯に一乘院宮真敬親王とともに参加。(『後西院御茶湯之記』)

●二月九日、東宮大夫を兼任する。(家譜)

●二月十六日、皇太子朝仁親王の禁裏御所への行啓に供奉。(家譜)

●三月二十七日、後西院より古筆類(詳細不明)を贈られる。(无上)同日、和歌を詠ずる。添削者は後西院。題「梅風／竹鶯／忍恋」(御詠草／函架番号六一六四九)

●五月二十八日、当座和歌会に出詠。添削者は基熙。題「瓶花」(御詠草／函架番号六一六九二)

●閏五月六日、当座和歌会に出詠。添削者は基熙。題「時鳥遍」(御詠草／函架番号六一六九〇)

●閏五月七日、常子内親王及び大聖寺宮永亨女王とともに妙法院へ出掛ける。(堯恕)

●閏五月十五日、基熙とともに妙法院へ出掛ける。(堯恕)

●閏五月二十九日、兼日和歌会に出詠。添削者は後西院。題「五月雨欲晴」(御詠草／函架番号六一六五〇)

●七月五日、般舟院で行われた新広義門院の七回忌に着座。(基熙)

●七月九日、後西院の催す茶の湯に基熙及び一乘院宮真敬親王たちとともに参加。『後西院御茶湯之記』

●八月二日、基熙・常子内親王・慶寿院たちとともに妙法院へ出掛け、花火を見る。(堯恕)

●九月十六日、当座和歌会に出詠。添削者は基熙。題「秋露／江紅葉／名所浜」(御詠草／函架番号六一六七四・六一六九三・六一六九四)

●十一月十五日、申刻、結婚後に住まう新邸へ移住。(无上・基熙)

●十二月九日、戌刻前、女一の宮憲子内親王の御所へ御簾入り。(无上)

●十二月十一日、憲子内親王、降嫁。その時の様子は「行莊尤厳儀也」(堯恕)といわれた。(无上・堯恕)

●十二月十二日、婚礼の祝儀として妙法院宮堯恕親王より使者が遣わされる。(堯恕)

●十二月二十四日、婚礼の祝儀として鹿兒島藩主島津光久より太刀馬代黄金十両・時服・十一荷二種を贈られる。(基熙)

貞享元年(一六八四)甲子 十八歳

從二位權大納言左大臣東宮大夫

●一月二日、年始の挨拶のため妙法院宮堯恕親王が来邸。(堯恕)

●一月二十日、基熙・常子内親王・大炊御門信名たちとともに妙法院里坊へ出掛ける。(堯恕)

●一月二十四日、禁中(盡元院)御会始に初出詠。添削者は後西院。題「家々甌春」(御詠草／函架番号六一六五一)

●一月二十七日、新院(後西院)御会始に初出詠。添削者は後西院。題「東風暖人簾」(御詠草／函架番号六一六五二)

●二月九日、一乘院宮真敬親王より『不空鞞索神咒心経』(元慶五年藤原高子願経)を贈られる。「亜相(家熙)殊好手跡」という理由からであった。(基熙)

●二月二十二日、水無瀬宮御法楽和歌会に出詠。添削者は後西院。題「社頭祝」(御詠草／函架番号六一六五三)

●二月二十四日、禁中(盡元院)月次御会に初出詠。添削者は後西院。題「浦月／契恋」(御詠草／函架番号六一六五四)

●二月二十五日、聖廟御法楽和歌会に出詠。添削者は後西院。題「夕歎冬」(御詠草／函架番号六一六五五)

●二月二十七日、新院(後西院)月次御会に初出詠。添削者は後西院。題「河辺柳／言出恋」(御詠草／函架番号六一六五六)

●三月二十四日、禁中(盡元院)月次御会に出詠。添削者は後西院。題「遠浦春曙／野外遊絲／忍通書恋」(御詠草

／函架番号六一六五七)

●三月二十七日、新院(後西院) 月次御会に出詠。添削者は後西院。題「花有遅速／樵笛声幽」(御詠草／函架番号六一六五八)

●四月十六日、靈元院の命により『仮名年中行事』一巻を書写。御所へは基熙が持参。(基熙)

●四月、新院(後西院) 月次御会に出詠。添削者は後西院。題「山新樹／寄鏡恋」(御詠草／函架番号六一六五九)

●五月二十八日、新院(後西院) 月次御会に出詠。添削者は後西院。題「雨中早苗／旅行夕友」(御詠草／函架番号六一六六〇)

●六月十一日、宮中懺法講(導師は毘沙門堂宮公弁親王)を聴聞。(堯恕)

●六月二十五日、聖廟御法楽和歌会に出詠。添削者は後西院。題「禁中橋」(御詠草／函架番号六一六六一)

●六月二十九日、新院(後西院) 月次御会に出詠。添削者は後西院。題「水辺夏月／寄本結恋」(御詠草／函架番号六一六六二)

●七月七日、禁中(靈元院) 七夕御会に出詠。添削者は後西院。題「乞巧奠」(御詠草／函架番号六一六六三)

●八月二十四日、禁中(靈元院) 月次御会に出詠。添削者は後西院。題「宮城野／海橋立」(御詠草／函架番号六一六六四)

六六四)

●八月二十七日、新院(後西院) 月次御会に出詠。添削者は後西院。題「初鴈／秋恋」(御詠草／函架番号六一六六五)

●九月九日、禁中(靈元院) 重陽御会に出詠。添削者は後西院。題「菊粧如錦」(御詠草／函架番号六一六六六)

●九月二十七日、新院(後西院) 月次御会に出詠。添削者は後西院。題「待人擣衣／夕陽映鳴」(御詠草／函架番号六一六六七)

●十月一日、青蓮院で竹生島弁才天とその靈宝が開帳されたため、常子内親王及び寺田無禪ともに出掛ける。七寸程の本尊のほか、聖武天皇・白河院などの筆とされる経典類が展示された。(无上・堯恕) 同日、左大将を兼任する。(家譜)

●十月十四日、戌刻、弟の大炊御門信名卒、享年十六。法名、至誠心院泰寂順理。(无上)

●十一月十四日、至誠心院(大炊御門信名) 追善のため『妙法蓮華経』『寿量品』を楷書体で書写し、近衛家の菩提寺のひとつである西王寺へ奉納。(无上・『近衛家熙公遺墨展覧会日録』 同日、『般若心経』を楷書体で書写。(遺墨

・『近衛家熙公遺墨展覧会日録』)
●十二月五日、常子内親王とともに廟参(大徳寺か)。帰

路、日敵院へ立ち寄り、妙法院宮堯恕親王と対面。(堯恕)
●十二月十七日、新院(後西院) 月次御会に出詠。添削者は後西院。題「山歳暮／寄国祝」(御詠草／函架番号六一六六八)

貞享二年(二六八五)乙丑 十九歳 従二位権大納言左大将東宮大夫

●一月一日、権中納言西園寺実輔(前関白鷹司房輔男)が晩に発狂して内儀を刺殺、女房二人に怪我を負わせた上、自害。(无上・堯恕)

●一月四日、年始の挨拶のため妙法院宮堯恕親王が来邸。

(堯恕)

●一月十六日、踏歌節会の内弁をつとめる予定であった右大臣鷹司兼熙が、この年の元日に事件を起こした西園寺実輔の実兄だったため交替することとなり、代わりに内弁をつとめることとなる。妙法院宮堯恕親王より祝儀として兩樽二種を贈られる。(无上・堯恕)

●一月二十一日、後西院の催す茶の湯に基熙及び一乘院宮真敬親王とともに参加。『後西院御茶湯之記』

●一月二十四日、禁中(霊元院) 御会始に出詠。添削者は後西院。題「世治文事興」(御詠草／函架番号六一六六九)

●二月一日、後西院の催す茶の湯に一乘院宮真敬親王とともに参加。この日が後西院の生涯最後の茶事かと思われる。

『後西院御茶湯之記』

●二月六日、春日社御法楽和歌会に出詠。後西院による最後の和歌の添削。題「暁帰雁」(御詠草／函架番号六一六七〇)

●二月十日、皇太子朝仁親王の新御殿への行啓に供奉。(家譜)

●二月十五日、後西院の容態が悪化。(堯恕)

●二月二十二日、午下刻、後西院崩御、宝算四十九。崩御後間もなく聖徳太子の生まれ変わりであるとの説がとねえられた。(无上・堯恕)

●三月二十八日、常子内親王とともに妙法院へ出掛ける。

(堯恕)

●春の二十五日、伏見院宸筆の『古今和歌集』真名序を臨模。(陽明文庫蔵／函架番号九二一九七)

●四月二十五日、基熙より後西院相伝の「勅額書方」及び「入木之事」を伝授される。(基熙)

●五月二十三日、後西院の形見として、粉川肩衝の茶人・飛鳥井雅経筆の色紙(「かへる山なにかはありてあるかひは来てもとまらぬ名にこそ有けれ」) 掛物・若草茶壺を贈られる。(无上・基熙・槐記) 飛鳥井雅経筆の色紙を所持していたように、後西院は古筆を非常に好んだ。妙法院宮堯恕親王は院の所持する手鑑を見たが、その感想として「堯

仁親王・亮仁親王之短冊有之、惣御手鑑五冊、裏表皆短冊也、短冊三千枚也、尤天下希有之手跡ども有之、奇妙事也」(堯恕／延宝八年二月一日条)と述べている。後西院は近衛家との関係が非常に深くもあり、家熙の古筆好きもあるいは後西院の影響が大きかったのかも知れない。

●六月二十四日、禁中(霊元院) 月次御会に出詠。添削者は基熙。題「早朝秋／寄杜恋」(御詠草／函架番号六一六九八)

●六月二十五日、聖廟御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。題「咍鷄」(御詠草／函架番号六一九六二) 同日、点取当座和歌会に出詠。添削者は基熙。題「河夏月／不逢恋／寄松祝」(御詠草／函架番号六一九六二)

●六月二十六日、当座和歌会に出詠。添削者は基熙。題「納涼」(御詠草／函架番号六一六九二)

●七月七日、禁中(霊元院) 七夕御会に出詠。添削者は基熙。題「織女待夕」(御詠草／函架番号六一七〇一)

●七月二十四日、禁中(霊元院) 月次御会に出詠。添削者は基熙。題「海辺秋風／野外尋虫／無名立恋」(御詠草／函架番号六一七〇〇)

●七月二十五日、自邸で当座の和歌会を催す。添削者は基熙。題「擣衣」(无上・御詠草／函架番号六一六九二) 同日、兼日和歌会に出詠。添削者は基熙。題「連夜待恋」(御

詠草／函架番号六一六九二)

●七月二十八日、常子内親王及び大聖寺宮永亨女王とともに妙法院へ出掛ける。(堯恕)

●八月十一日、伝宗尊親王筆の『菊合序』を臨模。(陽明文庫蔵／函架番号九二九五)

●九月九日、禁中(霊元院) 月次御会に出詠。添削者は基熙。題「園深菊決菜」(御詠草／函架番号六一七〇二・六一七〇三)

●十月十日、基熙・常子内親王・大聖寺宮永亨女王たちとともに妙法院へ出掛ける。(堯恕)

●十月十七日、基熙より歌仙色紙形(「乱之事」)を妙法院宮堯恕親王とともに伝授される。(基熙・堯恕、ただし堯恕では十八日とする)

●十月二十四日、禁中(霊元院) 月次御会に出詠。添削者は基熙。題「廬橘子低／池似鏡」(御詠草／函架番号六一七〇四)

●十一月十七日、宮中での御茶口切に参加。(堯恕)

●十一月二十五日、常子内親王筆の『妙法蓮華経』の外題を書写。(无上)

●十二月一日、憲子内親王の誕生祈禱のため、妙法院宮堯恕親王、この日より二夜三日の間不動供を修する。(堯恕)

●十二月三日、無卦入り。諸方より祝儀が届けられる。(无

上)

貞享三年(一六八六)丙寅 二十歳 従二位内大臣左大將

●一月六日、年始の挨拶のため妙法院宮堯恕親王が来邸。

(堯恕)

●一月十四日、午刻、第一子である姫君が誕生。母は憲子内親王。諸方より祝儀を贈られる。(无上)

●一月二十四日、禁中(靈元院)御会始に出詠。添削者は基熙。題「池水浪静」(御詠草/函架番号六一六九七)

●一月二十九日、妙法院宮堯恕親王が来邸。(堯恕)

●二月二十日、後西院追善の『妙法蓮華経』が完成。この経で家熙は「第三」を担当し、書写している。なお、外題は青蓮院宮尊証親王が書写した。(堯恕)

●二月二十六日、後西院追善のために常子内親王が書写した『妙法蓮華経』の奥書を書写。家熙は法華経書写の功德により母の「息災安穩而福寿無窮増益衆善」を願っている。(陽明文庫蔵/函架番号八九五二〇)

●二月二十六日、内大臣に任せられる。東宮大夫は止められる。(家譜)

●閏三月五日、辰刻、叔母の大聖寺宮永亨女王寂。法名、本元院泰嶽永亨尼大禪師。(堯恕)

●閏三月二十八日、源兼行筆(当時は源俊房筆とされた)

の平等院鳳凰堂扉色紙形を写すために宇治の平等院へ下

向、亥刻帰宅。(基熙)ただし、陽明文庫蔵の家熙筆の『平

等院扉色紙形写』の奥書は、四月三日付となっている。奥

書「右九品要文堀河左大臣俊房公/筆跡也一日以公暇詣宇

治郡/平等院瞻望扉書画聖徳太子御書而/其古体無比類者也雖然或

文/字所々消滅或頃日以新墨認之/仍殘其全体分漸稀也尤

可惜/哉而予仰寺僧佞構高床如形/雖令摸写之猶未応意

写之/則古風猶遺末世者歟/貞享三年孟夏初二内大臣家

熙」(陽明文庫蔵/函架番号九三〇〇七)

●五月十六日、午下刻、内大臣拜賀。妙法院宮堯恕親王よ

り祝儀として兩樽三種を贈られる。(堯恕)

●五月二十八日、基熙より近衛家相伝の即位灌頂及び「談

山之事」を伝授される。(无上・基熙)

●六月二日、野々村清右衛門(陶工野々村仁清の子)を自

邸に呼び寄せ、作陶させる。(无上)

●六月四日、基熙・常子内親王・日嚴院堯憲たちとともに

一乘院宮里坊へ出掛ける。(堯恕)

●六月九日、左兵衛督吉田兼敬より中臣祓などを伝授され

る。(无上・基熙)

●六月二十五日、聖廟御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。

題「社頭祝」(御詠草/函架番号六一七〇五)

●七月六日、妙法院へ出掛ける。(堯恕)

●七月七日、禁中(靈元院)七夕御会に出詠。添削者は基熙。題「二星契久」(御詠草/函架番号六一七二〇)

●七月十二日、寛文五、六年頃に近衛家へ売却された、庭田重資・尊円親王・勸修寺経顕・楊梅兼親・清水谷実熙・為名・中山定宗・聖護院覚蒼・見円・正親町公蔭・洞院公賢・徽安門院・進子内親王・儀子内親王・正親町実久・仁和寺法守・後花園院・青蓮院尊道・正親町忠季・筆者不明の二十人の書いた一品経和歌懐紙を臨書。(陽明文庫蔵/函架番号九二九六二)

●七月二十三日、常子内親王及び一乘院宮真敬親王たちとともに妙法院へ出掛ける。(堯恕)

●八月十七日・二十一日、後水尾院の七回忌懺法講(導師は常修院宮慈胤親王)を聴聞。(堯恕)

●八月二十七日、近衛家領の摂津国伊丹に鎮座する牛頭天王社の額を揮毫。(无上)

●九月一日、午刻、幡枝に出掛け終日遊ぶ。(家熙)

●九月九日、禁中(靈元院)重陽和歌会に出詠。添削者は基熙。題「秋菊盈枝」(御詠草/函架番号六一七〇六)ただし、東京国立博物館蔵の家熙筆和歌懐紙では、題が「籬菊盈枝」となっている。

●九月二十日・二十一日、後光明院の三十三回忌に行われ

た法華八講に着座。(家譜)

●十月三日、宮中の御茶口切に参加。(堯恕)

●十一月四日、「いまだとしわかけれどもきりやう有により」(无上)て、基熙より入木道七ヶ灌頂を伝授される。(无上・基熙)

●十一月二十七日、基熙・常子内親王・憲子内親王とともに妙法院へ出掛ける。(堯恕)

●十二月五日、常子内親王・入道常算(東園基賢)とともに日嚴院へ出掛ける。(堯恕)

●十二月二十八日、大雲院住持の空也院の所望により『当麻曼陀羅縁起』の裏書を書写(銘文は靈元院宸筆、詞書は二十七日に基熙が執筆)。礼として基熙へ黄金二枚・線香一裹、家熙へ黄金一枚をそれぞれ贈られる。(基熙・陽明文庫蔵/函架番号八九五一九)

貞享四年(二六八七)丁卯 二十一歳 従二位内大臣

●一月七日、白馬節会の内弁をつとめる。(家譜)

●一月、中納言平松時量の所持する米元章の書を摸写。(陽明文庫蔵/函架番号九三〇〇〇)

●二月十日、禁中(靈元院)御会始に出詠。添削者は基熙。題「毎年愛花」(御詠草/函架番号六一九四一ほか)

●二月十二日、水無瀬宮御法楽和歌会に出詠。添削者は基

熙。題「寄朝恋」(御詠草／函架番号二二八六八)

●二月十七日、贈左大臣園基音(家熙の外曾祖父)の、三十三回忌につき、日藏院で御経供養が行われる。『妙法蓮華経』のどの巻かは不明だが、家熙も書写している。(堯恕)

●三月二日、常子内親王とともに妙法院坊官の菅谷式部卿寛探宅へ出掛ける。(堯恕)

●三月十三日、左大将を辞する。(家譜)

●三月十五日、常子内親王・慶寿院・入道常算(東園基賢)とともに妙法院へ出掛ける。(堯恕)

●四月十七日、新帝東山院の御会御代始に出詠(皇太子朝仁親王Ⅱ東山院の即位は、三月二十一日)。添削者は基熙。

題「禁庭松久」(御詠草／函架番号六一九四三ほか)

●四月、聖廟御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。題「夕顔露」(御詠草／函架番号六一七一九ほか)

●五月八日、丑刻、嫡子の家久が誕生、母は憲子内親王。

幼名は敏君。家熙が誕生の際に柳原實行の子となった嘉例に倣い、家久は少納言平松時方の子とされた。「敏君」の名も、お七夜の時に時方が命名している。祝儀として徳川綱豊より馬・太刀・黄金二十兩・二種一荷、熙子より白銀二十枚・樽・肴二種をはじめとして、諸方より贈られる。

(无上・秘鈔)

●五月十六日、仙洞(靈元院)御会始に出詠。添削者は基

熙。題「鶴伴仙齡」(御詠草／函架番号六一七一八)

●六月二日、当座和歌会に出詠。題「瞿麦勝紫花」(御詠草／函架番号一二九〇〇ほか)

●六月十一日、兼日和歌会に出詠。添削なし。題「対泉待月」(御詠草／函架番号六一七〇七)

●六月十二日、当座和歌会に出詠。添削者は基熙。題「雨後蟬」(御詠草／函架番号六一七〇八)同日、同じく当座和歌会に出詠。添削なし。題「夏恋」(御詠草／函架番号六一七〇九)

●六月二十五日、聖廟御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。題「春雨」(御詠草／函架番号六一七一)同日、東大寺が所蔵する源頼朝筆の消息を摸写。(陽明文庫蔵／函架番号九二九五三)

●七月七日、禁中(東山院)七夕御会に出詠。添削なし。題「七夕祝」(御詠草／函架番号六一七二)同日、一乘院宮真敬親王とともに妙法院へ出掛ける。(堯恕)

●八月二十三日、大嘗会国郡及び檢校行事等卜定の上卿となる。(家譜)

●九月九日、重陽御会に出詠。添削者は基熙。題「菊契千秋」(御詠草／函架番号二二八七一ほか)

●九月二十四日、仙洞(靈元院)法楽和歌会に出詠する基熙詠の和歌を代理で清書。(基熙)

●十月十四日、藤原行成筆の『和漢朗詠集』二巻を入手。

「希代之物也、家珍無比類者也」とされた。(基熙)

●十月二十日、常子内親王及び慶寿院たちとともに妙法院へ出掛ける。(堯恕)

●十月二十四日、仙洞(靈元院) 月次和歌会に出詠する基熙詠を代理で清書。(基熙)

●十月二十五日、伝源俊頼筆の『卷子本古今集切』を模写。

(陽明文庫蔵／函架番号九二九五二)

●十一月十七日、大嘗会辰日節会の内弁をつとめる。(家譜)

●十二月二十三日、基熙四十賀を主催し、和歌一首を詠じて贈る。(基熙・御詠草／函架番号六一九四八ほか) また、四十賀屏風に付す和歌も詠ずる。題「霞／松影映池」(御詠草／函架番号六一九四七ほか) 出詠は家熙・常子内親王・妙法院宮堯恕親王(漢詩)のほか多数。これらの詩歌は、読師の前大納言坊城俊広、講師の彈正少弼交野時香によつて披露された。(堯恕)

●十二月二十五日、摂政一条冬経より使者があり、靈元院の寵臣である権大納言松木宗条(東山院の外祖父)を内大臣に任ずるため、暫くの間内大臣を辞するよう伝えられる。

(基熙)

元禄元年(二六八)戊辰 二十二歳 從二位内大臣

●一月十一日、仙洞(靈元院) 御会始に出詠。添削者は基熙。題「泉石有佳趣」(御詠草／函架番号六一七一三)

●一月十六日、踏歌節会の内弁をつとめる。(家譜)

●一月二十四日、禁中(東山院) 御会始に出詠。添削者は基熙。題「柳弁春色」(御詠草／函架番号二二八七六ほか)

同日、基熙・常子内親王・一乘院宮真敬親王たちとともに妙法院宮堯恕親王のもとへ出掛ける。(堯恕)

●二月一日、内大臣を辞する。家熙の代わりに靈元院の寵姫松木宗子の父権大納言松木宗条が内大臣に任ぜられる。(无上)

●二月二日、妙法院宮堯恕親王が来邸、藤原行成筆の『和漢朗詠集』一冊を見せる。(堯恕)

●二月十日、仙洞(靈元院) 春日社御法楽和歌会に出詠。題「の夕立」。ただし、所労により少納言石井行豊に代筆させる。(御詠草／函架番号六一九五三ほか)

●二月十六日、松木宗条が内大臣を辞し、内大臣に還任。(家譜)

●二月二十二日、水無瀬宮御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。題「春月」。ただし、実際は「春日望山」の題で詠まれた和歌が出詠された。(御詠草／函架番号六一七一四ほか・『近代御会和歌集』 同日、水無瀬宮四百五十御忌

御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。題「は霞」「ま花」「ふ述懐」(御詠草／函架番号二二八七八ほか)

●二月二十五日、聖廟御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。題「暁」(御詠草／函架番号六一七一五)

●三月十九日、常子内親王の無野入りの祝儀の際に、急遽催された能「野々宮」のワキをつとめる(シテは基熙)。常子内親王は「何のさたもなくふと出給ふゆへ、誰もく／きもつづし、めをおどろか」した。(无上)

●四月十三日、妻の憲子内親王、この頃までに体調が悪化。(堯恕)

●四月十五日、未刻、憲子内親王薨去、享年二十。法名、台岳院香山良薫。清浄華院に葬られる。この日から三日間廢朝。(无上・堯恕)

●五月四日、妙法院宮堯恕親王が来邸。触穢のため屋敷の内庭に入らぬように来たという。(堯恕)

●六月二十四日、手鑑の裏に貼る松の絵八枚を妙法院宮堯恕親王に所望し、この日に贈られる。(堯恕)

●六月下旬、東大寺蔵の『四聖讃』(建長本『四聖御影』。現在も東大寺蔵)を写す。奥書「右四聖讃見東大寺靈宝也／往年一覽之次写其体尤／殊勝者歟／元禄元林鐘下旬(家熙花押)」(陽明文庫蔵／函架番号九三〇〇二)『四聖御影』は、聖武天皇・菩提遷那(婆羅門)・行基・良弁の

四人の姿を描き、賛したもので、建長九年の聖武天皇五百年遠忌を機に始められた四聖講の本尊として東大寺学僧の聖守により製作された。現在、賛の剥落が進むが、家熙が写したこの『四聖讃』には、当時の姿がよく残されている。

(奈良国立博物館『特別展 神仏習合』展図録)

●七月七日、禁中(東山院)七夕御会に出詠。添削者は基熙。題「牛女年々渡」(御詠草／函架番号六一七一六)ただし、所労によつて結果的には詠進しなかった。

●八月十二日、常子内親王・妙法院宮堯恕親王・一乘院宮真敬親王たちとともに青蓮院宮尊証親王のもとへ出掛け。(堯恕)

●九月九日、禁中(東山院)重陽御会に出詠。添削者は基熙。題「菊花色々」(御詠草／函架番号六一七一七ほか)

●九月十二日、妙法院で催された能を、基熙・常子内親王のほか、地下人二百余人とともに見る(大夫は嶋谷吉兵衛)。(堯恕)

●九月十八日、台岳院(憲子内親王)の旧殿を西王寺へ寄付することとなり、移築が開始。(基熙)

●九月三十日、改元の上卿をつとめる。常子内親王は「内府何もしゆびよくつとめられしよさもよく、諸家にもほめらるゝ」と聞き、喜びを隠さなかった。(无上)

●十月二十五日、台岳院(憲子内親王)旧殿の移築が完了

し、方丈の上棟式が行われる。(基熙)

●十一月七日、常子内親王たちとともに妙法院宮堯恕親王のもとへ出掛ける。(堯恕)

元禄二年(一六八九)己巳 二十三歳 従二位内大臣

●一月一日、未明、春日社に参詣。「読書始」として『日本書紀』神代巻と『古今和歌集』賀部を読む。また「吉書始」として和歌三首を詠ずる。(家熙)

●一月十一日、仙洞(霊元院) 御会始に出詠。添削者は基熙。題「春松契千年」(家熙・御詠草/函架番号六一七二一ほか)

●一月十六日、踏歌節会の内弁をつとめる。(家譜)

●一月二十四日、禁中(東山院) 御会始に出詠。添削者は基熙。題「梅有喜色」(御詠草/函架番号六一七二二)

●一月二十五日、仙洞(霊元院) 聖廟御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。題「海辺霞/橋落葉」(基熙・御詠草/函架番号六一七二四)

●閏一月十八日、常子内親王・一乗院宮貞敬親王たちとともに妙法院宮堯恕親王のもとへ出掛ける。(堯恕)

●閏一月二十五日、仙洞(霊元院) 聖廟御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。題「里卯花/祝言」(御詠草/函架番号六一七二三)

●二月二十一日、常子内親王・中務卿・寺田無禪たちとともに伏見へ桃の花見に出掛ける。(无上)

●二月二十二日、禁中(東山院) 水無瀬宮御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。題「野若菜」(御詠草/函架番号六一七二四)

●二月二十五日、禁中(東山院) 及び仙洞(霊元院) 聖廟御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。禁中題「祝言」、仙洞題「暮春/木枯」(御詠草/函架番号六一七二五)

●二月二十七日、基熙・常子内親王たちとともに妙法院宮堯恕親王のもとへ花見に出掛ける。昼には催された能を見る(大夫は安原善左衛門)。(堯恕)

●三月二十五日、仙洞(霊元院) 聖廟御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。題「苗代水/寄暁恋」(御詠草/函架番号六一七二六ほか)

●四月十四日、台岳院(憲子内親王) 追善のため、『妙法蓮華経』八卷及び『金剛般若経』を书写。(基熙) 同日、憲子内親王の一周忌につき、妙法院宮堯恕親王より香典として金子三百疋を贈られる。(堯恕)

●四月二十五日、仙洞(霊元院) 聖廟御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。題「貴賤更衣/岡五月雨」(御詠草/函架番号六一七二二)

●五月二十五日、仙洞(霊元院) 聖廟御法楽和歌会に出詠。

添削者は基熙。題「残菊／麓柴」(御詠草／函架番号六一七二七)

●五月二十八日、基熙の『源氏物語』の校合に参加。(基熙)

●五月前後、立花を行うが増える。(无上)

●六月二十五日、禁中(東山院)及び仙洞(靈元院) 聖廟御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。禁中題「寄風恋」、仙洞題「菖蒲／尋縁恋」(御詠草／函架番号六一七二八ほか)

●七月七日、禁中(東山院) 七夕御会に出詠。添削者は基熙。題「七夕橋」(御詠草／函架番号六一七三〇)

●七月十八日、常子内親王、近衛家菩提寺の大徳寺へ自筆の『妙法蓮華経』八巻を奉納。外題は家熙が書写。(基熙)

●七月二十四日、仙洞(靈元院) 法楽和歌会に出詠する基熙詠を代理で清書。(基熙)

●七月二十五日、仙洞(靈元院) 聖廟御法楽和歌会に出詠する基熙詠を代理で清書。自身は出詠。添削者は基熙。題「沢嶋／神社」(基熙・御詠草／函架番号六一七二九)

●八月十二日、伝小野道風筆の「楽府」、伝藤原行成筆の「朗詠下巻」、伝藤原佐理筆の「白氏文集詩」を入手。基熙は「今度感得子細、非只事、弘法大師之加護也」として驚嘆している。(基熙)

●八月十六日、八月十二日に入手した三蹟の古筆人手の祝いを行う。(无上・基熙)

●八月二十五日、仙洞(靈元院) 聖廟御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。題「秋田稲妻／寄秋風恋」(御詠草／函架番号一二八八〇)

●九月二十一日、『般若心経』を行草体で書写。(遺墨) 空海の命日である二十一日にあわせ、以後、元禄四年九月二十一日までの三年間にわたり毎月書写した『般若心経』二十六部(元禄四年は閏月あり)が陽明文庫に伝わる。『解題佳品日録』

●十月二十一日、一乗院宮真敬親王より所望の盆石「残雪」の賛(和歌一首)を詠ずる。添削者は基熙。(御詠草／函架番号一二八八四)

●十一月五日、空海筆の『灌頂歴名』を臨模。(陽明文庫蔵／函架番号九二九五)

●十一月十六日、雪の積もった松を和歌一首とともに基熙に贈る。(基熙・御詠草／函架番号六一七三一)

●十一月二十五日、仙洞(靈元院) 法楽和歌会に出詠する基熙詠を代理で清書。(基熙)

●十二月五日、『新楽府』上下を摸写。(陽明文庫蔵／函架番号九三〇五七)

●十二月二十五日、仙洞(靈元院) 聖廟御法楽和歌会に出

詠。添削者は基熙。題「樵柴／誓恋」（御詠草／函架番号六一八六五ほか）

●十二月二十九日、筆者未詳の『与陳伯之書』（本文は全百七行）を臨模。ただし、家熙の書風とはやや異っており、あるいは寺田無禪の手による可能性も考えられる。（陽明文庫蔵／函架番号九二九五四）

元禄三年（一六九〇）庚午 二十四歳 従二位内大臣

●一月七日、白馬節会の内弁をつとめる。（家譜）

●一月十一日、仙洞（靈元院）御会始に出詠。添削者は基熙。題「野沢始迎春」（基熙・御詠草／函架番号六一七四四）

●一月十三日、父の基熙に関白宣下。（堯恕）

●一月十六日、踏歌節会の外弁をつとめる。（家譜）

●一月二十四日、禁中（東山院）御会始に出詠。添削者は基熙。題「禁中祝」（御詠草／函架番号六一七三五）

●一月二十五日、仙洞（靈元院）聖廟御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。題「山早秋」（御詠草／函架番号六一七二二六）

●一月下旬、小野道風筆の『玉泉帖』を臨書。（陽明文庫蔵／函架番号九二九〇七）

●一月、伏見院御製の和歌二十首に極めを書く。（春名好

重氏『古筆大辞典』

●二月十三日、常子内親王たちとともに妙法院宮堯恕親王のもとへ出掛ける。（堯恕）

●二月二十二日、禁中（東山院）水無瀬宮御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。題「春雨」（御詠草／函架番号六一七三七）

●二月二十五日、禁中（東山院）及び仙洞（靈元院）聖廟御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。禁中題「岡新樹」、仙洞題「寒草霜」（御詠草／函架番号二二八八七）

●三月十五日、慈道親王筆の消息を一通は双鉤填墨、一通は臨書する。奥書「以慈道親王真蹟写之／元禄三春二月望日（家熙花押）」（陽明文庫蔵／函架番号九二八七五）

●三月十九日、一乘院宮真敬親王とともに妙法院宮堯恕親王のもとへ出掛ける。（堯恕）

●三月二十五日、仙洞（靈元院）聖廟御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。題「早春／春恋」（御詠草／函架番号六一七三八）

●三月二十七日、東寺へ出掛け、『真言七祖梵漢名号』や『風信帖』など、空海筆の書を臨書。（无上・陽明文庫蔵／函架番号八九五二六）同日、左兵衛督吉田兼連の母（養母は飛鳥井雅章女、実母は鳥丸光賢女）の六十賀に和歌一首を詠じて贈る。添削者は基熙。題「河花」（御詠草／函

架番号六一七四五)

●四月十九日、常子内親王たちとともに妙法院宮堯恕親王のもとへ出掛ける。(堯恕)

●四月二十五日、仙洞(靈元院) 聖廟御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。題「惜春／擣衣稀」(御詠草／函架番号一七八五)

●五月二十五日、聖廟御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。題「七夕／曉鐘／初冬雨／夜雪／蘆鹿」。(御詠草／函架番号六一七四六)

●五月下旬、「跪清論言事」云々ではじまる尊円親王筆の書を臨書。奥書「以尊円親王真跡写之／元禄三歳五月下旬(家熙花押)」(陽明文庫蔵／函架番号九二八七一)

●六月八日、仙洞(靈元院) 玉津嶋社御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。題「初冬」(御詠草／函架番号六一七四七)

●六月二十五日、禁中(東山院) 聖廟御法楽和歌会に出詠する基熙詠を代理で清書。(基熙) 自身は出詠。添削者は基熙。題「郭公類」(御詠草／函架番号六一七四八)

●六月二十八日、「正応五年十月十五日弟子沙門素実敬白」の本奥書を持つ世尊寺定成筆の『後深草院願文』を臨書。書写奥書「右一卷以世尊寺定成卿真跡鸚子臨之／元禄三年

林鐘念八(家熙花押)」(陽明文庫蔵／函架番号九三〇二九)

●七月二日、仙洞(靈元院) 玉津嶋社御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。題「朝尋花」(御詠草／函架番号六一七三九)

●七月七日、禁中(東山院) 七夕御会に出詠。添削者は基熙。題「七夕迎夜」(御詠草／函架番号六一七四九)

●八月十五日、当座和歌会に出詠。添削者は基熙。題「閑中月／月下菊」(御詠草／函架番号六一七四〇)

●八月二十一日、仙洞(靈元院) 玉津嶋社御法楽和歌会に出詠。添削者は基熙。題「寄国祝」(御詠草／函架番号六一七四一)

●八月二十四日、自邸で連歌会を催す。参加者は家熙のほか、基熙・連歌師猪苗代兼寿・参議裏松意光・三位石井行豊など十二名。「埋木やことばの花の名取河(悠々基熙)／春の日数もはやき瀬の波(兼寿)／山遠く霞も雨もはれそめて(会々家熙)／朝かぜかるしすだれまく袖(裏松意光)」(以下略)。管見では、家熙の一字名「会」が資料に見える初例。連歌会のあとで参加者は藤原定家詠「名取河春の日かずはあらはれて花にぞしづむ瀬々の埋木」の三十一文字をそれぞれ頭に据えて和歌を詠ずる。家熙の題は「河辺花」(出題者は冷泉為綱、添削者は基熙)。(基熙・御詠草／函架番号六一七五〇)

●九月一日、前権大納言油小路隆貞蔵の「梅嶺無梅」云々

の絶句三行書を摸写。奥書「右絶句以隆貞卿本摸写之體
／形勢可謂唐筆雖然筆法粗／慕本朝賢跡執之可為寂照／俊
苜等之真跡者歟／其体尤殊勝之者也／元禄三年九月一日
（家熙花押）」（陽明文庫蔵／函架番号九二九〇〇）

●九月九日、禁中（東山院）重陽御会に出詠。添削者は基
熙。題「禁庭菊」（御詠草／六一七四二）

●九月十日、藤原教家筆の願文・和歌・詩序を臨模。（陽
明文庫蔵／函架番号九二九七五）

●九月十六日、仙洞（靈元院）玉津嶋社御法楽和歌会に出
詠。添削者は基熙。題「嶺霞」（御詠草／函架番号六一七
五一）

●九月二十一日、伝空海筆の『与本国使請共帰啓』を双鉤
填墨。（陽明文庫蔵／函架番号九二八九二）

●九月二十五日、仙洞（靈元院）当座和歌会に出詠。題「寄
筵恋」（仙洞和歌御会）

●十月十日、仙洞（靈元院）玉津嶋社御法楽和歌会に出詠
する基熙詠を代理で清書。（基熙）自身は出詠。添削なし。
題「早春卜梅」（御詠草／函架番号六一七四三）

●十月十三日、西王寺の額「西王禪寺」を揮毫し、奉納。
（基熙）

●十月二十二日、常子内親王とともに妙法院宮堯恕親王の
もとへ出掛ける。（堯恕）

●十月二十四日、仙洞御所で行われた大藏卿伏原宣幸の『孟
子』の講義を聴聞。（基熙）

●十一月四日、仙洞（靈元院）玉津嶋社御法楽和歌会に出
詠。添削者は基熙。題「屋上霞／通書恋」（御詠草／函架
番号六一七五二）

●十二月五日、嵯峨天皇・空海・橘逸勢・朝野魚養・中将
姫・菅原道真・小野道風・藤原佐理・藤原行成・藤原道長
・藤原公任・藤原定頼・源俊房・源俊頼・世尊寺伊経・藤
原忠通・九条良経・藤原教家・宗尊親王・世尊寺行能・世
尊寺経朝・世尊寺定成・伏見院・慈道親王・尊円親王各筆
の古筆類を臨書。奥書「此是一軸本朝善書自／弘仁聖蹟至
尊円親王書／抑／淳和天皇亭子院等之聖蹟／吉備公藤敏行
紀時文橘／兼行素性等之賢跡此外／氏姓流聞者不可勝数惜
／哉不伝其書適以真跡所／摸之書纔廿余体也只怨為／画帝
類豹之誤有後世／者。墨池輩諦正之則古／風猶遺末世者歟
／元禄三歳臘天初五／（家熙花押）」（個人蔵）

●十二月二十日、藤原行成筆の『白樂天詩卷』（寛仁本）
を双鉤填墨。（陽明文庫蔵／函架番号九二九二四）

●十二月二十三日、仙洞（靈元院）玉津嶋社御法楽和歌会
に出詠。題「霞始聳／寄草恋」（御詠草／函架番号六一七
五三）

●十二月二十七日、大師流書家藤木敦直の子寂源の所持し

ていた小野道風筆の『三体白詩卷』を臨書。奥書「右一巻
以寂源本写之字々／非無烏焉馬之執■／元禄三歳臘天廿七
日（家熙花押）」（陽明文庫蔵／函架番号九二九一六）

【以下つづく】

（みどりかわ あきのり・慶應義塾大学大学院博士課程）